

ヘルマン・ハインペルの歴史研究

— 戦後の西ドイツと

ヒストリスムスに関する覚書 (1) —

阿 部 謹 也

序

かって私は、戦後の西ドイツにおける東ドイツ植民史研究の本質について考察した際、極めて専門的な学術研究のなかに、研究者の無自覚な立場の直接的な反映がみられること、しかも、それにも拘らず研究が客観的な方法意識のもとで行なわれていることなどを指摘したことがある。そこでは、西ドイツの東方地域研究を代表する専門研究者シュレージンガーについて、次のように書いておいた。《……彼の中世史研究は論理的につながらない生活感覚の次元で、ある面では無自覚なところで、といってもよいが、現在の問題となっている。中世史研究も現代に生きている自分という研究主体を通して現代史研究にならざるをえないという点の自覚が稀薄なために、無自覚なところで、特定の立場との非科学的な癒着が起っているのである⁽¹⁾》。そこで指摘した歴史認識における研究主体としての自己省察の欠如という現象は、シュレージンガーだけにみられるものではなく、総じてアカデミズム史学の底流をなす傾向でもあり、東・西ところを限定するものでもない。しかし、西ドイツにおいては、それはヒストリスムスとして、歴史認識のひとつの方法論にまで結晶している点が特に注目されなければならない。前稿においては、東ドイツ植民という一専門分野のなかで、ヒストリスムスがどのようにして

(1) 西ドイツの東方研究と西欧理念——中世東ドイツ植民史研究を中心に——思想
495号 1965年9月, 39頁。

その欠陥を露呈しているかを示した。本稿ではヒストリスムスの伝統をつぐ正統的な中世史家ハインペルをとりあげ、この問題に正面からあたってみたい。西ドイツに数多い中世史家のうちでも特にハインペルをとりあげるの⁽¹⁾は、彼が第二次大戦と《その後の破局》を真剣に受けとめ、そのなかでの自己省察を厳しく行なおうとしているだけでなく、研究者の国民的義務をも鋭く自覚せざるをえなくなっているからである。いわば、ランケ以来のヒストリスムスの伝統を戦後ドイツの困難な諸状況のなかで、せいっぱい生かしてゆこうとするときの限界的な在り方ともいうべき姿をハインペルにみるからだ、といってもよいだろう。過去の時代に没入しようという前提のもとに、歴史のなかの個性を掘り起してゆこうとするヒストリスムスの方法は、もとよりそのままでは現在に生きる方法とはなりえない。だが、ハインペルがそのなかでせいっぱい行なおうとしている自己省察の努力は、それなりに大切にしていかなければならない、と考えるからでもある。

ハインペルは1901年にミュンヘンで生まれ、ミュンヘン、フライブルク兩大学で歴史を学び、1946年以来ゲッチンゲン大学の中世史の教授となり、中世後期を専門領域としている。1953年には同大学の学長をも兼ね、かたわらマックス・プランク歴史研究所の所長として活躍している。ハインペルの研究領域は、時代的には前稿で扱ったシュレージンガーのそれと必ずしも異っているわけではない。それにも拘らず、両者にはかなりの違いがみられる。それはひとつは個人的な資質・性向によるものであり、ひとつは学問の伝統の問題でもある。

ハインペルは、はじめペロウのもとで経済史を学び、《レーゲンスブルグ市の産業》⁽²⁾という著名な論文で学界にデビューした。だが彼の関心は徐々に

(1) この立場に立つ歴史研究者のうち、方法論、歴史理論に関心を向けている代表的な人々に、Theodor Schieder, Reinhard Wittram, Werner Conze, Fritz Wagner, Otto Brunnerなどをあげることができる。いずれもハインペルとも密接な関係があり、ハインペルの影響を受けている。

(2) Das Gewerbe der Stadt Regensburg. im Mittelalter. Mit einem Beitrag von Franz Bastian: Die Textilgewerbe. Beihefte zur Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte. IX. H. Stuttgart 1926.

いわゆる中世一般史に傾き、戦前すでに《15世紀の教会改革と帝国改革》⁽¹⁾、《ディートリッヒ・フォン・ニエム》⁽²⁾、《アレクサンダー・ロエスと13世紀ドイツ人の自己意識》⁽³⁾、《ハインリッヒ一世史への覚書》⁽⁴⁾などの研究を通じて思想史に接近している。一方で彼は《帝国議会文書》⁽⁵⁾の編集を行ない、モヌメンタの編纂者としても力量を示し、一般史の専門研究者としての地歩を固めていた。戦後もこの方向は変っていない。ダールマン・ヴァイツのあの浩瀚な《ドイツ史料必携》を40年ぶりに改訂しはじめると、地味な努力を続け、西ドイツ史学界で派手ではないが、深い土壌のような役割を果たしている。戦後のハインペルには更にもうひとつの研究方向が認められる。それは論文集《人間とその現在》⁽⁶⁾に集約されている、従来の中世史像の検討と新しい中世史像形成の試みであり、更にそれと直接に関係している志向として、歴史学の反省、《ドイツにおける歴史研究の組織形態について》の展望などがある。これらの反省と再検討の努力は、決してドラスティックな形で行なわれているわけではないが、そのような反省を余儀なくさせたものが、戦中戦後の体験であることはいうまでもない。第一次大戦以後、1933年を経て1945年にいたるドイツ史をも、おのが民族の不可欠の一環として認識しようとする痛切かつ真摯な努力がそこでなされている。（《歴史への降伏か？》⁽⁷⁾、《大学の責任と課題》⁽⁸⁾、《大学改革の諸問題》⁽⁹⁾など）。これは一見当然

(1) Studien zur Kirchen- und Reichsreform im 15. Jahrhundert, 1929.

(2) Dietrich von Niem. Münster, 1932, Westf. Biograph. 2. Veröffentl. d. Hist. Komm. d. Provinz. Inst. f. westf. Landes- und Volkskunde.

(3) Alexander von Roes und das deutsche Selbstbewußtsein. des 13. Jahrhunderts. Archiv für Kulturgeschichte. Bd. 26, 1935.

(4) Bemerkungen zur Geschichte Heinrichs I, 1936.

(5) Deutsche Reichstagsakten. Die historische Kommission der Bayerischen Akademie der Wissenschaften. Bd. 1-17. (1376~1445)

(6) Der Mensch in seiner Gegenwart. Acht historische Essays. Göttingen 1. Aufl. 1954, 2. Aufl. 1957.

(7) Kapitulation vor der Geschichte? Gedanken zur Zeit. Göttingen. 1. Aufl. 1956, 2. Aufl. 1957.

(8) Schuld und Aufgabe der Universität. Göttingen. 1. Aufl. 1951, 2. Aufl. 1955.

(9) Probleme und Problematik der Hochschulreform. Schriften der Hochschulverbandes. 2. Aufl. Göttingen 1962.

のこのようにみえるが、西ドイツでは当然のことではない。例えば、ヨハネス・ハラールの有名な《ドイツ史の諸時期について》という書物が戦後再版されたとき、ナチ支配下に書かれた第13章の大部分は削除され、第一次大戦後に出た増訂版とほぼ同じ内容となっている。⁽¹⁾ ここにはナチ支配下のドイツを《なかったもの》とし、第一次大戦後、ナチ抬頭直前の時代と直結しようとする思考方法が象徴的に示されているのである。中世史家として専門研究に没頭し、《国民と時代を襲った運命のなかで守られた生活をしてきた》ハインペルは、戦後も研究を続行するためには、まずなによりも《すべての批判は自己批判でなければならない》と考え、歴史に対する自分の責任を明らかにすることから始めなければならなかったのである。その志向においてはゲルハルト・リッターやフリードリヒ・マイネッケの戦後の歩みと大きく異なるものではないが、その方法はハインペルに独自のものである。彼はまず、1900年頃から1920年頃に至るドイツ市民社会の像を自分の精神形成を通して把えようとする。⁽²⁾ ここには、方法に問題は残るとはいえ、自己省察を歴史家の義務とする厳しい態度が貫かれているのである。

専門史家シュレージンガーにはそのような方向はみられない。総じて彼には、歴史研究において研究主体としての自己をも省察の対象とするという意識は稀薄である。あるいはあえてそれを正面に出そうとはしない。それはさきに述べた学問の伝統の違いにもよるものである。シュレージンガーはオットー・ブルンナー、オットー・ヒンツェ、マックス・ウェーバーなどの系列

(1) ここでは版本の考証について述べる余裕はないので、別の機会にゆずり、年次だけ記しておく。 Johannes Haller, *Die Epochen der deutschen Geschichte*. Stuttgart u. Berlin. 1923. (初版) (初版ではビスマルクのドイツ統一までを扱っている)。1934年に増訂版、ここでは1918年まで扱われている。三訂版が1939年、これはヒトラーの政権獲得までを扱い、序文において、(本書の最終決定的な形が完成した)と宣言している。四訂版、1962年、List Bücher。これにはハラールの責任はなく、匿名の編集者によるもので、ほぼ1934年版の形に戻り、しかも *ungekürzte Ausgabe*, とされている。

(2) *Die halbe Violine, Eine Jugend in der Haupt-und Residenzstadt München*. Insel 1958.

に連なり、国制史、村落史研究においても社会学、特に比較社会学への傾斜が著しい。ハイネペルにおいては、むしろランケを現代の世界で如何に生かしうるか、に関心があり、政治史への傾向が強く、ヒストリスムスの社会学への傾斜⁽¹⁾に対してはかなり厳しい態度をとっている。そこから果してドイツ史が生まれうるのか、という懸念がハイネペルにはある。

ところで以上は、シュレージンガーが国制史・村落史あるいは社会・経済史家であり、一方ハイネペルが一般史家・政治史家であるという学問分野の違いによって片づけられるような違いの問題なのだろうか。総じて経済史といい、政治史といい、文化史といった各分野は対象を異にしている故に区分されているのだろうか。少し考えてみればそうでないことは明らかである。経済史、政治史、文化史等々のそれぞれの間には、単に方法の違いがあるだけであって、対象の違いがあるのではない。それでは、その方法の違いとは一体何か。本稿ではハイネペルにおける歴史認識の方法の問題を探ることによって、戦後西ドイツ史学界のもうひとつの面を明らかにしてみたいのである。

いうまでもなく、研究者が歴史認識の方法を確立してゆく過程にはいろいろなタイプがある。人類史の全過程を見通すことが出来た、と意識させるような世界観と共に、衝撃的な仕方で認識方法が自覚されるばあいもあるし、研究者がもっぱらおのれをむなしうして史料に沈潜し、史料をして語らしめるといふ、方法意識が自覚されていない《方法》もあるし、あるいは過去に没入することによって対象と融合する、という《方法》もある。だが、いずれのばあいにも、研究者の生活原理や生活感覚と、歴史認識の方法との間の緊張関係が、あいまいな形で野合するとき、その方法の生命は失なわれる、といつてよいだろう。こう考えると、ハイネペルにおける歴史認識方法確立の問題を扱うばあい、一方で彼が自己を自覚しはじめ、それを学問によって

(1) Entwurf einer deutschen Geschichte. Rektoratsrede von Mai, 1953, in „Der Mensch in seiner Gegenwart.“ s. 165 ff.

表現することを学びはじめた青年時代から現在までが考察の対象になり、他方で、そのなかでも彼が自分の歴史像に深刻な反省を加えなければならなくなった第二次大戦以後に特別な注意を向けなければならないことになる。勿論現存の歴史家の生活と思想についてのこのような観察は、一、二の論文によってつくしうるようなものではない。そこで、まず最初の手続きとして、戦後にハインペルがエッセーとして発表した中世史像に関する二・三の文章をめぐって、その中世認識の方法を展望し、更にそこから彼の生活原理としての信仰と、生活感覚として青年時代に形成された歴史感覚（時間意識・ヒストリスムス）との関連を明らかにし、それらが歴史学の学としての在り方にどう投影されているかをみたい。ついで、彼のヨーロッパ世界像、中世史像の背景をなす戦後の政治・文化状況のなかでの学問一般、大学教育、政治・文化についての発言を、そのときどきの政治の動きのなかに位置づけ、最後に、彼の戦前・戦後を通じての専門的学術研究の内容と方法を検討したい。このような手順には異論があるかもしれないが、専門的学術論文は、あくまでも研究者の世界観や日常の生活原理・生活感覚の裏づけをもってはじめて意味あるものになる、とするならば、このような方法も許されるだろう。研究者が生々の生活現実とかかわり合う緊張関係のなかに、歴史像や世界像形成の大きな契機があり、またその歴史像・世界像は他方で専門的学術研究との厳しい緊張関係のなかで、日々検証され、形成されていなければならないからである。本稿の目的は、生々の生活現実と専門的学術研究との両極の間における歴史像の緊張関係を抉り出した点にある。

(1) 戦後のヨーロッパと中世史研究

すでに述べたように、ハインペルは中世史家であり、戦前は学問的香りの高い論文を次々に発表して学界に確たる地位を築いていた。だが、第二次大戦後のハインペルは戦前の研究をそのまま営営として続行することは出来なかった。《著者のように、おのれの民族と時代を襲った運命のなかにあつて

守られた生活をしてきた者には、それだけ自己を省察すべき義務がある。それを果そうとし、……1945年の衝撃と、そのなかで新しくはじめるために与えられた機会に思いを馳せるとき、すべての批判は自己批判にならざるをえず、すべての警告は自分自身への警告にならざるをえない。問題を転じて、何故歴史学はかくも安易に結果に対する責任を負わねばならないのか、何故精神科学は時代の脅威と誘惑に対して、かくも無防備なのかを問う者は、自分自身それをなすがままにしていたことを想起しなければならない⁽¹⁾。こう書いたハイネルは、専門的学術論文を執筆するだけでは満足出来なくなっていた。彼は専門とする中世史について、更に歴史学全体について、その意味を問い直し、新しい歴史像を形成しようとした。これこそ戦後の困難な状況のなかでの彼の真剣な模索の出発を意味していた。そしてその歴史像形成にあたって、戦争直後のハイネルの支えとなったのが、「ヨーロッパ」なのである。

ハイネルにとって、中世は現代や古代からはっきりと区別された認識対象として、即ちひとつの世界として存在しているだけではなく、現在の世界（いうまでもなくヨーロッパ）を規定するものとして、いいかえれば現代認識の不可欠の前提としての意味をもっている。1947年に書かれた論文のなかで「中世はヨーロッパの基盤をなしている。ヨーロッパにおけるわれわれの生活は中世的ヨーロッパの変容なのである。われわれは皆この中世的基盤のうえに立っている。古代はヨーロッパにとって精神的な力であり、精神的な

(1) Der Mensch in seiner Gegenwart. Acht historische Essays. Göttingen 1957.

の序文の言葉。因みに、この序文にハイネルの関心のあり方が明瞭に出ている。ハイネルが関心を寄せているのは「古いものでも古風なものでもなく、留まるもの das Bleibende, —われわれにとって、またそのときどきにおいて留まるもの、同時代的なもの、Annalistischなものであり、現在と同時代性……」である、と述べている。いうならば彼の関心は、歴史を発展の相下に見ることにあるのでも、同時代的なものを古いもの、新しいものとして、原因・結果の関係においてみようとすることにあるのでもない。彼は「歴史のなかに憩 Ruheを求めている。だがそれは遠く離れたところでの憩ではなく、種々な事物を運命として包括する時代のなかで、諸事物が併存しているなかでの憩なのである」。

遺産であった。それに対して、中世の全遺産は、われわれにとって、生活の諸々の関連において古代の遺産よりも直接的、ヨリ基本的なものである。ヨーロッパは中世によって生きている。たとえヨーロッパの大啓蒙期やその革命的結果のような叛逆、敵対という姿勢においてもそれは変らない。……すでに中世がヨーロッパを生み出していたのである⁽¹⁾。と述べている。この評価には、すでに先験的なあるいは政治的な立場が入り込んでいるかにみえ、その限りでシュレーンガー等と本質的な点では違わないかに思われるかもしれない。ヨーロッパという概念のなかに盛り込まれる内容如何によっては、この評価は特定の階級的利害あるいはその表現でもある《ヨーロッパ主義⁽²⁾》を代弁する機能をも持ちうるからである。だがハインペルは、ヨーロッパが中世的理念ではないこと、中世々界においてはヨーロッパについてほとんど言及されていないこと、理念としてのヨーロッパが中世には、古代と同様ほとんど存在していなかったことを十分に承知している。《中世人が思考し、生活する際の原則となった政治理念のなかでは、ヨーロッパは正当な地位を占めていなかった。そこでは別のことが問題になっていた。即ち神の国 Regnum Dei とその地上における模像……中世はヨーロッパについて何も述べていない。中世における歴史は、それがアジアの歴史でも、アフリカの歴史でもないのと同様に、ヨーロッパの歴史ではないのである。中世にとって、歴史とはヨーロッパ史ではなく、むしろ世界史なのである。といってもそこに示されているのはヨーロッパを越えて広がってゆく視野の広さではな

(1) Europa und seine mittelalterliche Grundlegung. 1949. Der Mensch in seiner Gegenwart. s. 70.

(2) 第二次大戦後、ヨーロッパという言葉がどのような意味で用いられているか、という点については、Leo Stern: Die klerikale-imperialistische Abendland-Ideologie. „Die bürgerliche deutsche Geschichtsschreibung von der Reichseinigung von oben bis zur Befreiung Deutschlands vom Faschismus.“ Bd. II, Berlin 1965, S. 400 ff. を参照。

(3) Gollwitzer, Heinz, Europabild und Europagedanke. Beiträge zur deutschen Geistesgeschichte des 18. und 19. Jahrhunderts, München, 1964. s. 15.

く、視角の独自の方向であり、世界史は救済史なのである⁽¹⁾。こうしてヨーロッパという理念が近世以後の産物であることが確認され、シュレージンガーにみられたような、現代ヨーロッパ理念がそのまま無媒介・無自覚に中世に持ち込まれる危険はさしあたり取り除かれた、といえよう⁽²⁾。しかし、それにも拘らず、ハイネペルは中世をヨーロッパの基盤として、ヨーロッパ的な《近代の》目で観察しようとする。それはどのようにして可能なのだろうか。しばらくハイネペルの説明を聞こう。

ハイネペルの関心は方法上の面と、ザハリッヒな面とに向けられる。方法上の関心は、従来の第二次大戦以前の中世史研究への批判として展開されている。従来の歴史研究においては、中世はあまりにもドイツ中世として集約されすぎており、そこではヨーロッパ的中世観察は困難であった。通常ヨーロッパ諸国で中世が研究対象とされる動機に数えられている、フマニスティシユな関心、カトリック的な動機、ロマンティックの評価のうち、ドイツでは最後にあげたロマンティックの中世理解がひとつの宿命のような役割を果たしていた、という。1770年にはじまるドイツ運動、さらに解放戦争のなかであらたに見出されたドイツの過去の歴史との絆は、ナポレオン支配からの自由、将来への国民的希望とあいまって、国民的な過去の探求に集中していった。それはあの皇帝政策論争において頂点に達する。いうまでもなく、そこでは他ならぬ《ドイツ》中世とその解釈が問題となったのであり、19世紀に

(1) Heimpel, a.a.O., s. 72.

(2) 1953年の学長就任講演においても戦後西ドイツにおけるヨーロッパイデーの反動的動きを批判して《すでに何も学ぼうとせず、多くの出来事を忘れ去ろうとする人々によって、またそのような人々のために、再びドイツ史が現われている；病める愛国者というお粗末な衣をまとった匿名の書物や、驚くべきことに実名のまま拍手を受ける鉄面皮さで、彼らはヨーロッパのために働いている、と主張している。実際のところ彼らは、敗れ、打破かれ、苦しんでいる者、分割によって肉親と裂かれた者達に、また同時に奇蹟的な経済復興によって思慮を失ってしまった国民のなかのある酵母に訴えているのであり、我々の忘れっぽさを養おうとしているのである……》。と述べている。Entwurf einer deutschen Geschichte. s. 180

おけるこの論争の現実的意味が大ドイツか小ドイツかという政治的問題であったことも周知の通りである。《1871年のドイツにとっては、新帝国の発足にあたって、決して明白な自己意識からではなく、ナショナルな過去をめぐる論争をもってはじめたことは特筆すべきことであつた》⁽¹⁾。祖国の本質についてのこのようなロマンティッシュな愛情のために、中世への学問的関心ももっぱら祖国に視野を限定されていた。こうして、全ヨーロッパ的視野は求めらるべくもなかったが、それはドイツが他国よりも遅れて統一を達成した、という事実と密接に関連し合ったものだ、と理解されている。

ハイネルのこの説明それ自体には問題はない。だが、この方法的考察には、戦前のナショナルな中世観察に代るべきものとして、ヨーロッパ的視角でのドイツ史並びに中世把握が当然のこととして前提されてはいないだろうか。ナショナルなドイツ中世把握を補うべき視角としての世界史的認識への志向は、ここでは問題にされず、ヨーロッパ的視角（しかも西ヨーロッパ）にとどまろうとする。この疑問は、彼のザハリッヒな面への関心に立入ることによって、尚明瞭になってくるだろう。そこでは、中世を論じながらも、彼のヨーロッパ現状認識が投影されているからである。

彼はヨーロッパ的中世把握を可能にする八つの事実を考えている。第一の事実が民族移動である。これは通常理解されているものよりもはるかに広く、ローマのリーメスへのアレマンネンの最初の攻撃から、東ゲルマンの移動、ブリテン島へのアングロ・サクソンの移動、1066年のノルマンによるイングランド征服、デンマークのアイスランド遡航、地中海へのノルマンの遠征、更にドイツの皇帝政策、中世東ドイツ植民をも含む広い概念として理解されている。この大がかりな移動によって、ヨーロッパ内に多様な諸民族が生まれ、同時にこの移動によってヨーロッパがビザンツヤビザンツ教会に規定されたバルカン、更にイスラム世界と対立することになり、《ヨーロッパ》

(1) Heimpel. a.a.O., s. 76.

が生み出された、と考えられるからである。この民族移動という《事実》がとりあげられた背後には、ハイネルが《ヨーロッパ》を諸民族の多様な共同体としてとらえ、しかもイスラムやビザンツと対立するものとしてみている、という前提即ち彼の現実認識がある、といわなければならない。

第二の事実は社会構造である。貴族と農民との間に様々な段階の《自由》が存在し、それが聖・俗両界の Feudalismus の基盤となる事態がヨーロッパ的 Feudalismus と把握される。レーン法と国家権力との間の緊張から、王政、議会制、領邦国家という様々な国家類型がうまれたという事実もヨーロッパ的と捉えられ、この Feudalismus をそれぞれの仕方で克服してゆく（官僚制国家、教育等によって）過程もまたヨーロッパ的と理解される。いいかえれば、フランス革命以後の近代《ヨーロッパ》の形成は、それ以前の中世ヨーロッパの否定のうえになり立っているのだが、その否定行為によって、逆に近代《ヨーロッパ》が中世ヨーロッパから大きく規定されている、という視角である。

第三の事実は、ローマ教会である。9世紀来、最終的には11世紀以来の東・西教会のシスマによって、ヨーロッパはローマカトリックの支配下に入り、その結果ローマ・カトリックに支配された北スラヴとギリシャ・カトリックの南スラヴとが分離した。そこから、国家と教会の確執が起り、世俗化された形では今日でも個人と共同体との緊張、良心と公的福祉との緊張とが規定されている、という。東・西教会の分離をヨーロッパの中世的事実と見做す考え方は、暗黙のうちにハイネルの《ヨーロッパ》が西ヨーロッパであることを示しているものである。

第四の事実は身分制的秩序に求められる。Nährstand, Wehrstand, Lehrstand の三区分と関連する Klerikalismus と聖界イムニテートがヨーロッパ的事実とされている。中世における教養の独占者としての Klerus のヨーロッパ全域における分布に近代ヨーロッパの萌芽をみようとするこの考え方は、身分制的秩序を近代代議制の先駆とする考え方と通ずるものである。

第五の事実は教会の自由 *Libertas Ecclesiae* である。教会の保護者として

のドイツ諸王に対して、フランスにおいてはみずから支配権を形成せんとする教会の改革運動があった。(クリューニー)。そしてドイツがそのトレーガーとならず、まさにフランスがその先頭に立ったところに (Gesta Dei per Francos) ドイツのヨーロッパにおける最初の孤立化が認められている。

第六の事実は都市である。農村と都市との関係の在り方がヨーロッパ的と見做される。市場の自由とその発展、その前提をなす都市共同体の自由。さらに合理主義の萌芽としての都市。そこに中世都市のヨーロッパ的意味が求められる。近代市民生活の萌芽が中世にたずねられているのである。

ヨーロッパと中世とを結ぶ第七の事実は文学である。中世がヨーロッパにラテン語、ラテンの Liturgie, ラテンの詩を遺した。ハインペルはそこにヨーロッパ的遺産をみている。これは第八の事実である《法》とも関連している。ヨーロッパの全民族がローマ法の影響を受け、カノン法によって律せられる部分をもっていた。これらが中世の諸大学を通して広められたことはいうまでもない。

以上の諸事実はいずれも周知のものであるが、これらがあらためて指摘されるのは、戦前の中世史研究がもっぱらドイツ中世史研究として行なわれてきた傾向に対して、中世史はむしろ、ヨーロッパ中世史として扱われねばならないことを示すために他ならない。だがそこには、彼のヨーロッパ現状認識が示されているだけでなく、彼の方法の問題性⁽¹⁾も露呈されているのである。

ハインペルは何故ドイツ中世史ではなく、ヨーロッパ中世史を要請しているのだろうか。この論文が書かれた1949年には、まだ世界の到るところで、

(1) この問題性についてはあとで論ずることになるが、あらかじめ簡単に指摘しておけば、理念としてのヨーロッパ意識が欠如しているという中世に、後代のヨーロッパ理念から抽出された歴史像を求めるのは、中世に入り込もうとするハインペルの方法と矛盾しないか、という点である。この疑問は、ハインペルが進歩思想=発展史観を否定しながら、実は発展史観から作り出された時代区分に従って考えている、という彼の認識方法自体の矛盾と関連している。

戦争は過去のものになりきっていなかった。とくに地理的ヨーロッパに住む者にとっては、ヨーロッパという言葉はある意味で戦場を意味していた。1494年のシャルル八世のナポリ遠征以来19世紀末に到るまでのヨーロッパ史はいわば戦争史であった。だが、そこには戦のさなかにあっても、分裂の只中にあっても、何か統一を予想させるものがあった。ナチオンという理念はヨーロッパに対立するものではなく、まさにナチオンと共にヨーロッパがあり、分裂を超越した統一があったという。こうして戦場としてのヨーロッパから、記憶としてのヨーロッパ、更に国家的エゴイズムを越えたところで組織される新しいヨーロッパ、即ち希望としてのヨーロッパが浮びあがってくる。ところで第二次大戦以後の世界においては、戦場としてのヨーロッパの克服がもはや西ヨーロッパの枠内では不可能なことは誰の目にも明らかである。東ヨーロッパを加えても可能とはいえない。現代ヨーロッパの危機は世界史的視野においてしか解決しえないものだからである。それにも拘らず、ハイネルは希望としてのヨーロッパを記憶としてのヨーロッパのうえに築こうとする。《ヨーロッパは記憶における統一に存している。ヨーロッパは存在する。何故なら共有財をもっているからである》。ここでハイネルがみているヨーロッパは、いうまでもなく中世ヨーロッパであって、現代ヨーロッパではない。だからこの現代ヨーロッパにどれほどのものが中世から遺されているかを探ろうとする。したがって八つの事実に教えあげられたものは、特殊ドイツ中世的な事実ではなく、まさに現在のヨーロッパ諸国の共通の遺産としてあげられているのである。しかし、すでに指摘したように、そこでは《東》ヨーロッパ世界は除外されている、という点に注意が向けられなければならない。ここにあげられた事実のすべては、西ヨーロッパに固有なものとして示されており、ヨーロッパ世界を東ヨーロッパやその他の非ヨーロッパ世界から隔絶した世界として捉えようとする西欧ヒストリシズムの志向・方法から抽出された事実なのである。ハイネルはここで《ヨーロッパとその中世的基盤》について語っているのであって、現代のヨーロ

ッパについて語っているのではない、ということも出来よう。だが過去から残された多くのもののうち、ある一定のもの（ここでは八つ）を遺産として評価しようということは、そこに何らかの現代ヨーロッパ認識が前提されているからに他ならない。ここに前提されているハインペルの現代ヨーロッパ認識がどのようにして生まれ、いかに自覚されているのか、という問題は後段に譲らなければならない独立した問題である。

第二次大戦直後のドイツにおいては、1933年以後の歴史への内外からの断罪があまりに厳しく、1945年の破局の衝撃があまりに深かったために、かえって一種の *Geschichtsmüdigkeit* が蔓延していた。それ自体としては健全なこの倦怠感、やがて経済の高度成長と技術化の推進によって、ついには急いで歴史と決着をつけてしまおうとする姿勢に横すべりしていった。このような状況を目前にみていたハインペルにとっては、ドイツの過去との連続を確かめようとするのは、ある意味で当然のことであった。「われわれは過去に手がかりを求めんとし、現在を理解するのである」。逆説的なこの表現のなかに、「歴史を失ってしまった」と自覚せざるをえない西ドイツにおける歴史家のアポリアが読みとれるのである。問題はそのアポリア克服の方法にあるのだが、それはハインペルのばあいランケ以来のヒストリスムの方法によって一定の枠を定められている。その枠とは一体何か。

(2) ハインペルの中世認識の方法

前節で、ハインペルの現代認識が、シュレージンガーのばあいとは逆に、実は中世認識に媒介されていることをみた。そこで次に、彼の中世認識は一体何に基づくものかを明らかにしなければならない。この問題を追求してゆくとき、彼の生活原理ともいべきプロテスタンティズムと、生活感覚としてのヒストリスムスの問題につきあたるであろう。

ハインペルはヨーロッパ中世という時代が、始まりと終わりがある真の *echt* 時代であり、またそのなかにいくつかの *Epochen* (*ἐπέχαι*) をもつ時代で

ある、という推定のうえでそれを扱おうとする。そして同時に、古代・中世・近代という17世紀以来の時代区分のシェーマが、古代オリエント、非ヨーロッパ諸民族・諸文化の歴史にはあてはまらない、という事実をも確認している。ヨーロッパ史内部の研究は世界史研究に解消してしまうようなものではない、という確信がここにみられるのである。このような観点に立って、彼はヨーロッパ史のなかから、中世を考察しようとする。

ところで、中世がひとつの真の時代であるということは、どのような根拠に基づいて主張されているのだろうか。通例の用語法によると、近代はみずから新しいものと自覚し、中世を遂に克服した時代であり、進歩思想のトレーガーでもあった。ハインペルは一回限りの歴史的《近代》をモデルネなるものから区別しようとする。モデルネという言葉によって、一回限りの新しいもの、Ein-für-allemal-Neueではなく、常に新しいもの Jewelis-Neue, Schon-oder Noch Moderne, 従って Zeitalterではなく、Zeitlage を考えているのである。《モデルネなるものをたずねることは、常に新しいものをたずねること、即ちわれわれにとって新しいものであり、われわれの先祖にとって新しいものであったし、またわれわれの子孫にとっても新しいものであるような、そういうものをたずねることである》⁽¹⁾。モデルネとは、いわば歴史的な概念ではなく、社会学的な概念である。常に出てくる新しい感覚に対応して、常に新しくなってゆこうとするものであって、世界史における位置づけではない。

通常中世は近代の形成によって解体してゆくものとして理解されている。たしかに近代は一連の解放として遂行された。僧侶教会からの良心の解放（プロテスタンティズム）、権威からの理性の解放（自然科学）、共同体からの個人の解放（個人主義）、ツンフトからの企業の解放（資本主義）、封建制からの市民の解放などである。中世は不自由で近代は自由、中世は拘束で近

(1) Heimpel. Über die Epochen der mittelalterlichen Geschichte. 1947 Der Mensch in seiner Gegenwart. s. 45.

代は解放と考えられている。ハインペルはこのような観察方法が果して時代を形成しうるだけの価値をもっているのかどうかを検討しようとする。このような観察方法は、いうまでもなく18世紀の市民意識によって形成されたものであるが、それに徹すれば、近代はヨーロッパ都市と市民層が抬頭した13世紀にはじまらなければならないし、他方中世は18世紀まで続いていなければならない。何故なら、《近代のはじめに市民の解放があるのではないからである。いわゆる近代は新しい自由と共に始まるのではなく、古い権利の消滅と共に始まる⁽¹⁾》からだ、という。ハインペルが正しいと見做している、従来の、中世の終末を15世紀とみる見解にたつ限り、市民は13世紀の都市の抬頭によって得た古い自由を新しいマハト、諸侯権力の前に失なわんとしていたことになる。近代は本質的には *bürgerlich* に始まるのではなく、*fürstlich* に始まる。だから1500~1800の時代を *Fürstenstaat* の時代と呼ぶことも出来よう。この *Fürstenstaat* はまだ貴族を基盤とするものであったが、18世紀にはこの国家からも、貴族からも市民が真に解放された。そしてこの市民がみずからモデルネの意識をもち続ける限り、自己意識の確立をヨリ古い時代に求め、近代がくりあげられ、同時に中世をヨリ引延ばす傾向が生ずる。

このように、歴史をモデルネという立場から、即ちそのときどきの新しいものから観察しようとする方法においては、同時に起るさまざまな出来事の相互の関連を (*Chronologie*) 必然的に縦の方向においてたち切ることになる。勿論ハインペルは、その特別な方法の目的が意識されているばあいには、この方法の一面の正しさをも認めている。だが、このような方法による観察から成立するものは前史にすぎず、真の歴史ではない、とハインペルは考える。中世がときには1789年まで続いたとされ、ときにはフリードリッヒ二世が最初の近代人として出現し、12世紀に中世を克服した、とされるような方法が誤っているのは、近代的な生活領域に直線的に連なる前史、即ち近

(1) Heimpele. a.a.O., s. 46.

代的人間の前史に、真の歴史の Chronologie のカテゴリーを適用するところから生ずる、とハイネルは考える。いいかえれば、歴史的現実を理解するためには、その時点における全生活態度が同時に見渡しうるような点からみなければならぬのであって、それを直線的に系譜を辿るような方法は歴史認識としては正しくない、というのである。歴史認識は同時代性において存在している、というのがハイネルの主張である。その時代の人間が何を問題として意識したのかを中心にして探ってゆかなければならない。近代は解放で始まったように見えるが、実際は支配によって始まったのだ、という。中世における市民的自由が棄て去られ、諸侯の権力を強化する方向において近代が始まったにも拘らず、15・6世紀に近代が始まったかのように見えるのは、17・8世紀の問題意識を過去に投影したからに他ならない、と説明される。ここで直ちに、何故ハイネルが15・6世紀に執着しているのか、という疑問が生ずる。Fürstenmacht 克服の意識は17世紀から起ったからである。ここにはハイネルの方法全体に関連する大きな問題があるのだが、中世の終末に関する問題を扱う次章で詳論したい。

それでは、ハイネルの言うように、中世に入り込んで見たところの中世とは一体何か。それはひとつの世界なのである。しかも、それは二つ、三つの要素が同時に有機的に結びついているような世界なのである。即ち、貴族支配としてのゲルマン民族社会、影響としての古代、教会としてのキリスト教の三要素の生きた結合である。古代やキリスト教が学校において教養として存在していたり、社会から分離した教会のなかに Frömmigkeit として存在しているような形ではなく、生きた姿で貴族世界と共に成長している限り、中世は存続しつづける、という。これらは形式的な現実構成の要素として存在しているのではなく、そこに生きているものとして、中世の内容をなすものとして捉えられている。キリスト教 das Christentum という概念は典型的な19世紀的概念であって、歴史的現実においてはこのような形であら

われたことはなく、むしろキリスト教会として出現しているのである。⁽¹⁾このような中世は、形容ではなく Handgreiflichkeit として存在しているひとつの世界なのである。いいかえれば精神 Geist の肉体化 Verleiblichung であり、Herrschaft und Zeichen への Verkörperung のことである。概念的でも分析的でもなく、リアルに存在しているもの、即ち Wörtlichkeit として存在しているものといってもよいだろう。《帯のなかに金銀または銭をもつな。褥のふくろも二枚の下衣も鞍も杖ももつな》⁽²⁾とあれば、シトー派の僧侶は衛生のことなどに拘わらず、日中の僧衣と夜の僧衣を変えず、帯をしたまま寝た、という。《汝等目覚めて祈れ》とあれば、言葉通りに日毎、夜毎祈りを奉げたのである。das rîche とあれば、それは抽象的なものではなく、帝国であり、王であり、帝国領であり、インゲルハイム、ミュールハウゼンであった。儀式も形式ではなく、リアルなものであって、儀式によって現実が出発した。文書 Urkunde も、ある具体的な土地が修道院に寄進されたという事実であると同時に、土地そのものをも意味し、更にその土地への支配権をも意味する。iustitia も客観的な法を意味すると同時に、権利をも意味するものである。中世はこのような世界として、近代科学の方法では必ずしも十分に捉えられない内容をもつ、と考えられている。近代社会科学の方法によっては、中世人の生活のエネルギーは容易には捉えられないが、ハインベルは中世に入り込むことによってそれをとらえようとしているのである。⁽³⁾ここで、すでにひとつの方法上の疑問点に逢着する。

(1) Brunner, Otto. Abendländisches Geschichtsdenken. in „Neue Wege der Sozialgeschichte. Göttingen. 1956.“ und. „Geschichtsdenken und Geschichtsbild im Mittelalter.“ (Wege der Forschung Bd. xxi) s. 454.

(2) Ihr sollt nicht Gold noch silber noch erz in euren Gürteln haben, auch keine Tasche zur Wegfahrt, auch nicht zwei Röcke (Matthäus 10. 9~10 nach der deutschen Übersetzung D. Martin Luthers.)

(3) マックス・ウエーバーは主観的・直観的な自己意識を究極的な価値として内面に秘めながらも、論理的、科学的な概念構成を企て、それによって西欧以外の地域を静的に捉えたが、そこでは西欧以外の地域の動態は捉えられていない。ハインベルの方法は、いわば対象に入り込むことによって対象を生かそうとするものである。ただ、問題はそれがモラリッシュな視角に留まる限り、鋭い実体把握が困難になる、という点にある。

近代とは異質な世界として把握された中世的世界への同化・共感が可能であり、またそれこそ事物把握の意味なのだ、というハイネルの主張は、当然ひとつのミスィンズムを前提とするものである。ハイネルのいう通り、中世人の生活現実を重視するという志向は尊重せらるべきであるが、果して異質な世界に入り込むことが可能なのか、という疑問が生じざるをえないのである。少なくとも、異質な世界に入り込める、という確信は合理的なものからは説明出来ない。自己の主体を抹消して対象のなかに入り込んでゆきたい、というランケの志向がここに生きているのであるが、そのとき、自己の主体の居場所がなくなる。いいかえれば、そのとき、自己の主体は、自己に対する責任を放棄して、他者の恣意に委ねる、という結果になるばあい⁽¹⁾が極めて多いのである。ランケの例がそれを如実に示している。ランケの叙上の言葉は、イギリス史への序文のなかで語られているのだが、そのランケが、普仏戦争の勝利こそ、フランス革命の成果を無に帰すという大きな成果をもたらした、と考えていたことは、私達にこのような主体抹消史観の恐るべき結末を示しているように思える。ランケは偉大な歴史家であったかもしれないが、世界史におけるフランス革命の意味を遂に理解しえず、現実把握において決定的な陥穽におち入っていたのである。勿論ハイネルはこのような陥穽を十分心得ている。彼は1953年のゲッチンゲン大学学長就任講演のなかで、ドイツ史像の修整・新しいドイツ史像の形成を論じた際、「現在の経験が深く受けとめられれば、それはドイツの過去の永続的な核に新しい生命を与えることになろう。歴史への洞察が深くラディカルになればなるほど、また自分の経験の受けとめ方が深ければ深いほど、ドイツ史上の見解の違いを越えるものについて、確固として存在するものについて、子供のため⁽¹⁾の歴史書に画きうるものについての一致は、それだけはっきり得られよう」と述べている。ここでは人間の恣意や主観の違いを越えて歴史像の一致をも

(1) Heimpel Entwurf einer deutschen Geschichte. Eine Rektoratsrede vom 9. Mai 1953. in „Der Mensch in seiner Gegenwart.“ s. 186.

たらずものとして、現在の経験を各人が出来るだけ深く受けとめることが第一の要件とされている。だが勿論それだけではない。《しかしこれらの恵みは、歴史家が歴史的な作用連関 *Wirkungszusammenhang* と歴史的な本質連関 *Wesenszusammenhang* とを区別するときのみ与えられるのである。……この区別を理論上の言葉でなく、歴史的観照において示してみよう。われわれはドイツの過去のなかに、われわれの本質の像 *Bild* を見出し、再発見する。それ自体で完結し、繰り返すことのない姿をみる。だが過去がわれわれと直接つながる道をも発見する。両者 *Bild und Weg* がドイツの歴史を形成しているのである》。これらは、理論的に煮詰められてはいないが、マックス・ウェーバーの認識根拠と実在根拠の区別と似た面をもっている。だが、ハインペルのばあいは、この両根拠を支える最終的な価値は、各個人が現在の経験を深めてゆく過程で悟るものと考えられており、各人に委ねられている。彼は個人の価値と国家との間に架橋しがたい深淵が存在する、とは考えたくないのである。現在の経験を深めてゆくことによって、この両者の統一が可能になるという期待があり、この点でウェーバーよりも楽観的である。とはいえ勿論それも期待にすぎず、現実ではない。だからハインペルにとっては戦後の生活は緊張の連続であって、戦前のように専門的学術研究に沈潜しきれずにいるのである。

ところで、この本質連関と作用連関とは、ハインペルの中世史研究に照してみると、中世に入り込むことによって得られるもの（即ち、ひとつの時代を同時代性においてとらえる方法）、と、過去からわれわれに直接つながる道、即ち中世から近代ヨーロッパに遺された遺産の問題となる。だが、すでに指摘したように、中世に入りきることによって、必ずしもハインペルが考えているような、その時代の全生活を見渡しうるという保証はえられない。いいかえれば、本質連関も、連関である限り、ある観点からの諸事実の整序にならざるをえず、ひとつの時代の客観的全体認識ではない。また作用連関も、すでに指摘したように、ハインペルの中世認識（これはある意味で

彼の現代認識でもあるが)に基づく諸事実の整序以外のなにものでもない。こう考えると、ハイネルの方法にも、論理上はシュレージンガーのばあいと同じ欠陥が存在していることになる。だがそう言い切ってしまう前に、私達はハイネルがこれらの研究の中核にすえている《価値》を掘りさげてみなければならない。その《価値》はハイネルの内面深く根ざすものであるばかりでなく、20世紀初頭におけるドイツ中産階級の知識人層の、都市での《日常生活の小秩序》⁽¹⁾のなかで育まれてきたものであり、その限りで、ある《客観性》をもつものである。しかしこの《日常生活の小秩序》は戦後のドイツにおいてはすでに過去のものでしかない。その自覚がハイネルにはあるために、シュレージンガーのように安易にヨーロッパ主義に癒着することなく、一定の距離をもって戦後のドイツに向わなければならないのである。ある意味では、戦後のドイツを内面的にはフレムトな世界とみざるをえないハイネルの立場が、彼の研究に一種の広がりをもつ意味を与えている、ともいえよう。ここで《価値》と表現されているのは、彼の生活原理と生活感覚のことであるが、この章の最後に、これらの《価値》から構成されているはずの、中世史の時代区分の問題に触れておかなければならない。その時代区分は、すでに述べた彼のヒストリスムスの認識方法によってなされているのだが、ヒストリスムスが本来単なる理論ではなく、一種の生活感覚である以上、そこに彼の生活感覚が投影されざるをえないし、また、中世と近代との交わりに関しては彼の生活原理ともいうべき信仰が介入せざるをえないからである。時代区分は、本来区分をする者が歴史にかける究極の価値の表現に他ならないのである。

中世の発端に関しては、従来様々の見解が出されてきた。ドン・ドニエブルへのフンの侵入(375)とか、オドアケルの即位(476)などが中世の開幕とされていたが、これらはいずれもローマ世界内部のことであるから問題にな

(1) Heimpel. Die halbe Violine. Eine Jugend in der Haupt-und Residenzstadt München. 1958. s. 155 ff.

らない。むしろクロードヴェッヒによるフランク、アルポインによるランゴバルド王国の建設こそ *Adelsherrschaft* としてのゲルマンがゲルマン人の国家を建設した最初のものであり、彼らが最初の中世的君主なのである。クロードヴェッヒがシャグリウスの国を滅した 486 年が中世の発端とみなされている。周知の通り、この時代区分に対してはベルギーの史家アンリ・ピレンヌの反論がある。ピレンヌのテーゼは、⁽¹⁾ イスラムが抬頭し、地中海貿易からヨーロッパ人を駆逐した時代から中世が始まるとし、シャルルマーニュが中世を開幕させたと見做している (800 年)。たしかに、古代が地中海をめぐる世界であった限りで、イスラムの進出は古代を終らせた。そして、古代世界に対する態度はメロヴィングとカロリングでは違っていた。メロヴィングの貴族はガリアをローマ化しただけでなく、そこには読書能力のある官僚がいた。他方、カロリングの下ではフランク王国はローマ化を免れたばかりでなく、リテラーリッシュな意味においてもバルバールであり、目に一丁字なき人々の国であり、その官僚は聖職者であった。 *analphabete Laien* と *gebildeter Klerus* との区分・中世的な区別がここに生じている。このようにピレンヌのテーゼは *geistvoll* なものではあるが、彼は本質的な点を見落している、とハインペルは考える。Referendar, Zölle, Steuer をみれば、メロヴィングは決して古代の国家ではない。フランクの諸王はローマ行政の遺制を利用したし、グレゴール・フォン・トゥールは古代のレトリークをどもりながらもしゃべっていた。だがクロードヴェッヒもテウテベルテもゲルマーネンであり、Heerbannkönig であり、従者の輪の中の Beurteiler、であり、騎士であり、Königsheil のトレーガーであり、Ernteverdoppler, Mitwisser der Vogelsprache であり、heilkräftige Medizinmänner であり、北から来り、あくまでも Nordvolk であった。いうならば、ピレンヌはメロヴィンガーのゲルマン的性格を見落とし、メロヴィンガーが歴史の舞台を地中

(1) Henri Pirenne. *Mahomet et Charlemagne*. Paris et Bruxelles 1937. (邦訳 創文社 1960年)

海からアルプス以北の世界に移したことを見損っている、とハイネルはいう。

ハイネルのように中世に入り込もうとする人間にとっては、ピレンヌのようにヨーロッパを広い世界から観察しようとする方法は抽象的なものとして映るのである。ピレンヌはヨーロッパを相対化し、外界の影響を受けて規定せられているそのパッシヴな姿を描いたのだが、ハイネルはヨーロッパ世界の個性、主体性の問題を提出した、ということが出来る。ここには、世界史認識と民族史認識を如何に統一するか、という、私達にとっても無縁ではない問題が鋭く浮びあがっているのである。

次に中世の終末期に移ろう。ここで、ハイネルが生活原理の問題と中世史研究との関連をどう考えているかが明らかになってくる。ここでも通説のいう、トルコのコンスタンチノーブル占領(1453)や、アメリカの発見(1493)にはこだわらない。むしろ、ここではトレルチの論点⁽¹⁾が問題になる。彼は宗教改革、即ちルターにはじまる古プロテスタンティズムがヨーロッパ近代を導入したのではなく、ヨーロッパ近代は17・8世紀の合理主義と共に始まる、と主張している。トレルチはルターの宗教改革がそのまま中世と近代の境をなすのではなく、それが世俗化されてゆく過程で近代世界が形成されてゆく、と考え、17・8世紀に近代の発端をみる。このトレルチは近代 *Neuzeit* を問題にしているのではなく、*moderne Welt* の成立を問題にしているのだ、とハイネルは評価する。即ち、彼は直線的な歴史観察を行なっているのであって、クロノロジーとしての歴史を観察しているのではない、というのである。しかもトレルチはその *moderne Welt* の成立にプロテスタンティズムがどれほど寄与したのかをみようとしていたのであり、その関心は宗教に集中していた。彼が中世をひとつの明確な文化類型と規定し、救済の超自然主義と *Kirchenstiftung* のうえに作られ、教会に指導される文化

(1) Troeltsch, E. Die Bedeutung des Protestantismus für die Entstehung der modernen Welt. Vortrag gehalten in Stuttgart. 1906. (邦訳 1962年)

と規定するとき、国家関係が全く捨象されているのも同じ視角によるものだ、という。だが、宗教改革が教皇や修道制を打破し、中世々界に最後の打撃を与えたことを勿論トレルチも否定していない。ルターは中世々界を終らせはしなかったかもしれないが、その存続を不可能にした。彼は望んだわけではないが、プロテスタント世界を生み出した。こう考えるハインペルは、中世の終末を17・8世紀に求める考え方を否定し、宗教改革にそれを求めようとし、あわせてトレルチの方法を救おうとしている。

ランケも1494年のフランス王シャルル八世のイタリア侵入をもって *Staatensystem* 成立の端緒とみなし、新しい *Fürstenmacht* の成立を重視したのだが、ハインペルはこの伝統を守ろうとしているのである。ランケが19世紀のヨーロッパを政治史を中心にして観察した方法をハインペルも守ろうとしている、といってもよいだろう。だが、それだけではない。ここにはプロテスタントとしてのハインペルの信仰がかけられているのである。前に未解決のままにしておいた疑問、即ちハインペルが何故15・6世紀に固執するのか、という疑問に、ここで改めて答えなければならないことになる。

(続)